栗林公園の「一歩一景」の景観的解読

真田純子[1]・出村嘉史[2]

[1]正会員　博士（工学）東京工業大学（〒182-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1-W9-95，E-mail: sanada.j.aa@m.titech.ac.jp）
[2]正会員　博士（工学）　岐阜大学（〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1，E-mail: demu@gifu-u.ac.jp）

栗林公園は日本を代表する回遊式庭園のひとつであり，「一歩一景」がその特徴であるが，具体的に庭園内が一歩一景となっていることや，それを生み出す仕掛けについてはあまり関心が払われていない．そこで，栗林公園の魅力をさらに高めるために，より良いガイドのための基礎資料として，庭園の構成に注目しながら栗林公園を解読していくことを目的とした．その結果，構成そのものに多様性を生み出す，要素を絞る，多種の世界観を近接させる仕掛けがある他，行動の誘発，風景の型の利用，体感の活用など，こまかな仕掛けがちりばめられていることが明らかとなった．

キーワード:*栗林公園, 池泉回遊式庭園, シークエンス景観, 大名庭園, 日本庭園*

１．はじめに

⑴ 栗林公園について

香川県高松市にある栗林公園は，公園と名前は付いているが，大名庭園で，松平家の下屋敷の庭園であった．

敷地内に平地の山である紫雲山を擁し敷地面積は山を入れて75万平方メートル，平地の庭園部が16万平方メートルである．国の特別名勝に指定されており，香川県を代表する観光地である．庭園内部は北庭と南庭に分かれている．北庭は改修が重ねられているが，南庭は複雑な形の南湖，北湖がしつらえられ，江戸時代の趣を残し，池泉回遊式庭園の特徴をよく表している．

栗林公園は日本三名園には入っていないが，白幡によると[1)]「三大公園」「日本三名園」という呼び方そのものが明治時代に登場したものであるという．明治天皇の行幸によって新聞などで後楽園や兼六園が有名になり，江戸時代からある「日本三景」になぞらえて三つの庭園を挙げたところから生まれたとも言われ，庭園の優劣だけで決まったとは言えない可能性も高い．

明治43年に文部省が策定した「高等小学読本」には，「我ガ国ニテ風致ノ美ヲ以テ世ニ聞エタルハ，水戸ノ偕楽園，金沢ノ兼六園，岡山ノ後楽園ニシテ，之ヲ日本ノ三公園ト称ス．然レドモ高松ノ栗林公園ハ木石ノ雅趣却ツテ此ノ三公園ニ優レリ」と書かれ，三名園には入っていないものの，美しさで名を馳せていたと推察できる．

池泉回遊式庭園の形式を持つ栗林公園のキャッチフレーズは，「一歩一景」で歩くごとに移り変わる庭園の風景をそのウリにしている．

⑵ 目的

先述のように，栗林公園は香川を代表する観光地であり，近年は瀬戸内国際芸術祭の影響もあり，外国人も多く訪れる．こうした国内外の観光客に対し，ボランティアガイドが庭園の案内を行い，また庭園を紹介したガイドブックなども発行されている．

しかしながらこうしたガイドでは，石や松などのモノの由来が大半を占め，公園内のシーンの多様性やその移り変わりはほとんど説明されていない．栗林公園の特徴である「一歩一景」とガイドの内容が合致していないと言える．栗林公園はすでに人気のスポットではあるが，庭園の魅力に対する解釈がより深まれば，より魅力を感じてもらえるようになると考えられる．

そこで本論では，より良いガイドのための基礎資料として，シーンの多様性やその変化と，なぜそのような変化が限られた庭園内で生まれるのかを，庭園の構成に注目しながら解読していくことを目的とする．

なお，本庭園は1745年に完成したとされているが，それまでの築堤に110年以上の月日を要したと言われ，明確な設計図があるわけではなく，意図の真偽については確認することができない．しかしながら，「一歩一景」のコンセプトに沿って，現存する庭園そのものを解読することによって，その見方による楽しみ方を顕在化することが可能である．したがって，本論における解読は，作庭者の意図を正確に読み取ることを目的とするものではなく，「一歩一景」とその仕掛けを発見的に推測し，提示するものである[注1)]．

２．一歩一景の解読

(1)歩行ルートとシーン

一歩一景の解読を行うにあたって，図-1に示すルートに従って，各記号の箇所を説明する．このルートは，現在栗林公園が推奨しているルートとほぼ一致する．それぞれの箇所は，見るべきシーンのほか，場面の転換にあたる箇所もあり，説明するシーンのすべてが主役となるシーンというわけではない．

(2)一歩一景の仕掛け

a)山裾の庭園

この地点から目の前に広がるのは，紫雲山まで続く緑である．しかし，地図を見ると紫雲山との間には百花円や西湖，建物など，様々な要素がある．

手前の低い木々，その先の少し高い松など手前から徐々に高い木があることで，それらが間のものを隠しながら紫雲山とこの地点が直接つながっているように見せ，山裾の庭のイメージを出していると言える．

b)北湖はまだ先

ルートに従って進み，北湖の方に移動する．北湖に向かって直角の遠路を進むことになるが，場所の雰囲気としては，ただの通路としての印象のみである．

これは，経路に沿って突き当りが土手になっており，そこへ施された植栽が北湖への視線を遮っていることによる．ここはまだ北湖を見るべき視点場ではないからであろう．見せないようにする，というのも演出のひとつであると考えられる．（図-2）

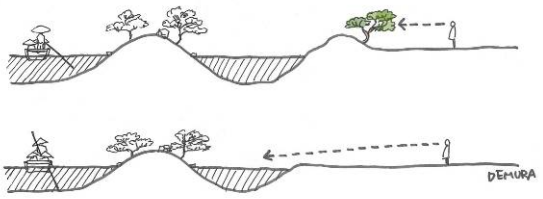

図-2　北湖への視線を遮る仕掛け

c)コイにつられて

園路を右に曲がると箱松と屏風松があり，これが正規ルートであるが，そこから左手にある雁木の方へ誘われるようにして行く人がいる．

雁木は階段状に水中に向かっており，それがこうした行動を誘発していると考えられる．また，雁木に近づくとコイが見えるため，そこでまた「しゃがむ」という行為が誘発される．ここで立っているときと座っているときの視点高さの差で，北湖の風景が大きく変化する．

雁木の上に張り出した松の枝で，立っている場合の視点からはあまり遠くの湖面まで見えないのに対し，しゃがむことで対岸まで見えるからである．この，行動を誘

図-1　取り上げた地点の位置図

発する装置と視界の制限によって，同じ位置でも異なる風景が見られるようになっている．（図-3）

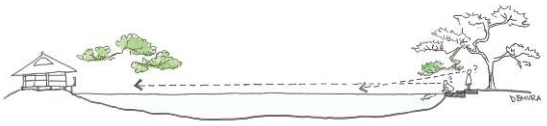

図-3　視線の到達点の変化

d)松のトンネルを楽しむ

ルートに戻ると，箱松と屏風松で作られた松のトンネルを通る．箱松の複雑な枝ぶりが見どころの一つとなっている．

こうして，閉じられた空間で，視線はかなりの近距離に集中するわけであるが，これによって，このあとに控える北湖ののびやかな風景を見るために，一度風景を閉じる役割も持っていると考えられる．

e)風景の急展開

松のトンネルを抜けて左に曲がると，北湖の風景が広がる．まず北湖の真ん中に見えるのは南側にある枝ぶりの美しい松が正面に見える後嶼（こうしょ）である．その後，園路に沿って赤い梅林橋まで行くと，北湖の真ん中に見えるのは前嶼（ぜんしょ）となる．つまり，ほんの数歩歩くだけで主役がいつの間にか入れ替わっているのである．

曲がった瞬間は動線前方へ視線が向くのに対して，数歩歩いて梅林橋に立った時点で，橋上であるがゆえに動線の直角方向に視線が向く．この視線方向の変化に加えて，橋に立った時には右側にある松によって先ほどまで主役であった後嶼は隠されているために，このような主役の入れ替わりが体験できる．（図-4）

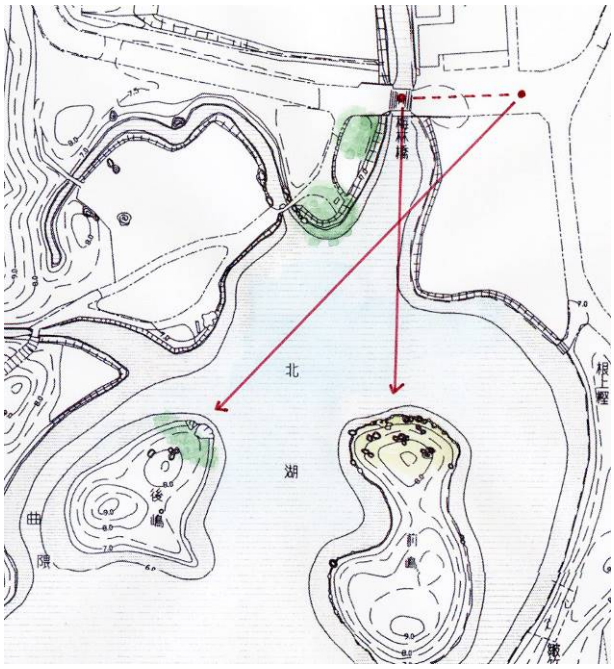

図-4　主役の入れ替わり

f)北湖の眺め

梅林橋からの北湖の眺めは，正面に前嶼，奥に芙蓉峰が見える．前嶼の正面には岩が多く散らした磯の趣に仕立てられ，北湖は海に見立てられていると考えられる．

地図で確認すると梅林橋から見える位置に集中的に岩があり，この位置から見ることを意識して配置された石だということがわかる．さらに，ヒョウタンのような形をしている前嶼に対し，梅林橋からの接線上に石が置いてあることもわかる．そのため鑑賞者の中に結ばれる映像としては，島の輪郭に石があることになり，より岩がちな風景を作り出す演出の意図が推測される．（図-5）

図-5 梅林橋から見る前嶼の岩

g)庭らしい庭を見る

梅林橋を過ぎて少し進むと園路の左側に，枝ぶりの面白い松，奇岩，遣水などいわゆる庭園の要素が詰まっている場所がある．栗林公園の見どころのひとつとなっている．

ここでは，園路の右側はあまり面白みのない壁のように整えられた松がある．松の向こうには桜があるが，ここから見ることはできず見えるのは松の「壁」である．また，まっすぐな道の突き当りには土手があり，先を見通すこともできない．見どころである左側の庭に自然と意識が向き，鑑賞すべきものが鑑賞されるように仕掛けられていると考えられる．

h)風景の区切り

園路を進み，左から張り出す土手に沿って右に曲がると，三方を土手で囲われた場所に入る．閉塞感があり，北湖を中心とする庭が終わったことを無意識のうちに感じさせる．（図-6）

図-6　地形を使った空間の区切り

i)山の中へ

さらに進むと石の橋があり，左には講武樹，いったん開けた後，その先は薄暗い森のような風景になる．

藪のような下草，複数の種類の低木，自然な雰囲気を残して剪定された高木（しかも斜めに生えている）など，これまで北湖の周りのよく手入れされた風景とは全く異なる野趣あふれるつくりにより，この森のような雰囲気が生み出されていると言える．地図をみると近くに開けた場所があるが，道が曲がって突き当りには築山があるため，開けた場所を見通すことはできず，深い山の中のような雰囲気になっていると考えられる．

j)分かれ道

少し進むと「森の雰囲気」の中に「里に出る道」「さらに山に分け入る道」という趣の違う分かれ道がある．

里に出る道は，掬月亭の屋根が木々の間からちらちらと見えていること，山に分け入る道は，地図上では視線の方向に南湖が広がっているのであるが，間に木の茂った築山があることにより，山奥へと入り込む道のように見えている．

実際にはすぐその先でつながっているのであるが，こうした性格の違う分かれ道があることで，選ぶ楽しみがあると言える．

k)海の眺め

掬月亭の手前を左に行き，五葉松のほうに行くと南湖を望むことが出来る．ここでは海を眺める風景が表現されている．

視点場となる五葉松の脇から右手前に見える岸には玉石が敷き詰められており，砂浜を表現した「州浜（すはま）」となっている．石を立てて岩場を表現した「荒磯（ありそ）」もある．南湖の中にもいくつかの石が散らして配置されている．南湖に浮かぶ楓嶼（ふうしょ），天女嶋にも岩が見え，ここから見る風景は全体的に岩がちである．また，目の前の天女嶋にも州浜が見える．

地図をるると，そこら中に石が置いてあるわけではなく，ここから見える位置だけにかなりピンポイントで配置されていることがわかる．さらに，楓嶼の右端には，ここから見た時の接線上に石がある．また天女嶋の州浜も接線上にあることがわかる．このように，島の見えの形に影響する場所に石や岸が配置されることで，少ない要素でより効果的に「海の眺め」を作り出していることを，読み取ることができる．（図-7）

l)石組みの面白さとその背景

掬月亭に入り，まずは西側の部屋へ向かうと，ここからは，紫雲山を背景に，函翠池と枝ぶりの良い松，石組の庭を眺めることができる．

地図を見ると函翠池のすぐ背後には鹿鳴原があるが，函翠池の遥島に植えられた松，函翠池の向こう岸に列植

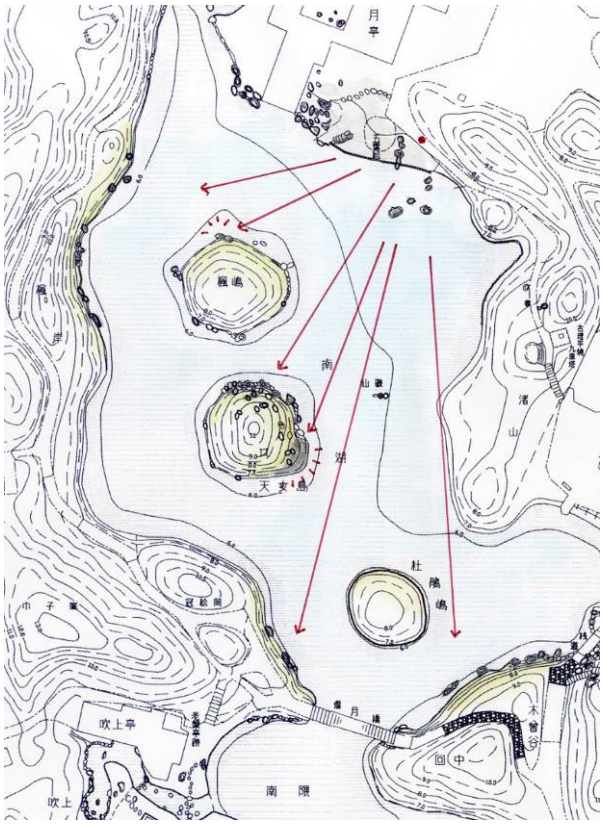

図-7 五葉松横からの南湖と岩

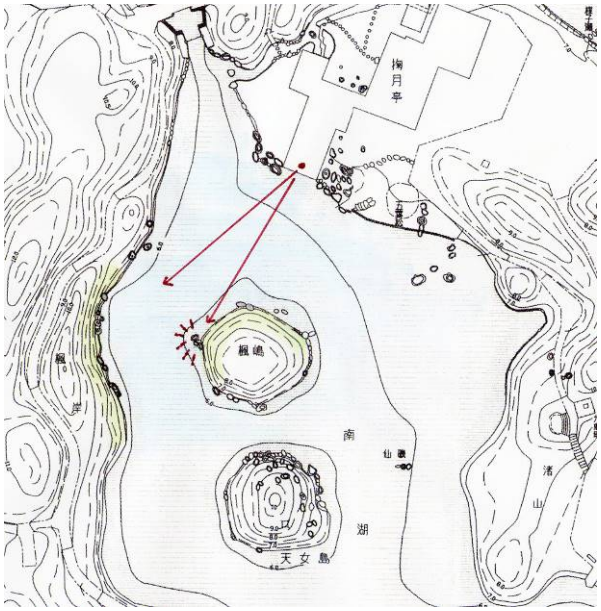

図-8 掬月亭からの南湖と岩

された低い松によって，みごとに視界から消されており，庭が紫雲山のすぐ麓にあるように見えるのである．

m)再び海の眺め

南湖に張り出した部屋に移動し，南湖を眺める．この部屋は船をイメージしたといわれており，南湖は海に見立てられている．

ここからの眺めも海というだけあって岩がちであるが，

地図を見ると，楓嶼の右端に見える石はこの視点場からの接線上にあることがわかる．五葉松の横からは見えなかった楓岸の石も，ここからは見える．このように南湖の岩は，この２地点からの眺めを「海」にするために意識的に配置されていると考えられる．（図-8）

n)再び山へ

掬月亭を出て，推奨ルート通り楓岸のほうに進むと少し左にカーブした上り坂がある．いかにも山の中に入っていく感じの道である．

それは，右手前に低木があり，その先には奥まで高木があるという木の配置によるところが大きいと考えられる．この先，舗装が砂敷きから玉石の石畳になる．さらに玉石の石畳の路面の凹凸が少し激しくなり，歩きにくさが増す．それがさらに「山の道」らしさを表していると考えられる．

o)松の前後

園路を進むと，しばらく南湖への視界が遮られた状態が続き，その後，南湖への視界が開けるところに出る．そこから数歩進むと，すぐに松が視界を遮るが，その後また風景が開ける．この松の前後，数歩あるくだけで風景が大きく変化する．

風景の構成要素の１つである掬月亭については，松の手前では掬月亭への視線入射角が掬月亭の後方から45度程度で，松の後では，90度程度になる．この視線入射角の大きさの違いは，掬月亭にいるような「仮想体験」を誘発する見え方，掬月亭が「鑑賞対象」となる見え方という，鑑賞者にとっての掬月亭との関係性の違いを生み出していると考えられる．

また南湖については，松の手前では，南湖の最も長い部分を島に邪魔されることなく見通すことが出来，奥行のある風景が得られる．対して松の後からは，横に広がりのある水面が卓越する風景となり，対岸の渚山の松が正面に際立って見えるようになる．このとき，僅かに張り出した右側の岸に生える松によって楓嶼と楓岸の間の湖面は見えず，正面に見どころを集中させていると考えられる．（図-9）

p)楓岸の散歩

南湖沿いの園路を進むと，しばらくは山の中のイメージが続く．

南湖との間に築山がしつらえられ南湖への視界が遮られるためである．道は緩やかに蛇行していて，池側だけでなく反対側も土手になっている．また，先ほどから続く歩きにくい玉石敷きも合わさって，山の中のイメージが演出されている．なお，この道は蛇行しているためすぐ近くまでの路面しか見えないが，道の両側にある竹垣の上端が空中で園路の線形を写し取り，先まで続くさまを楽しむことが出来る．

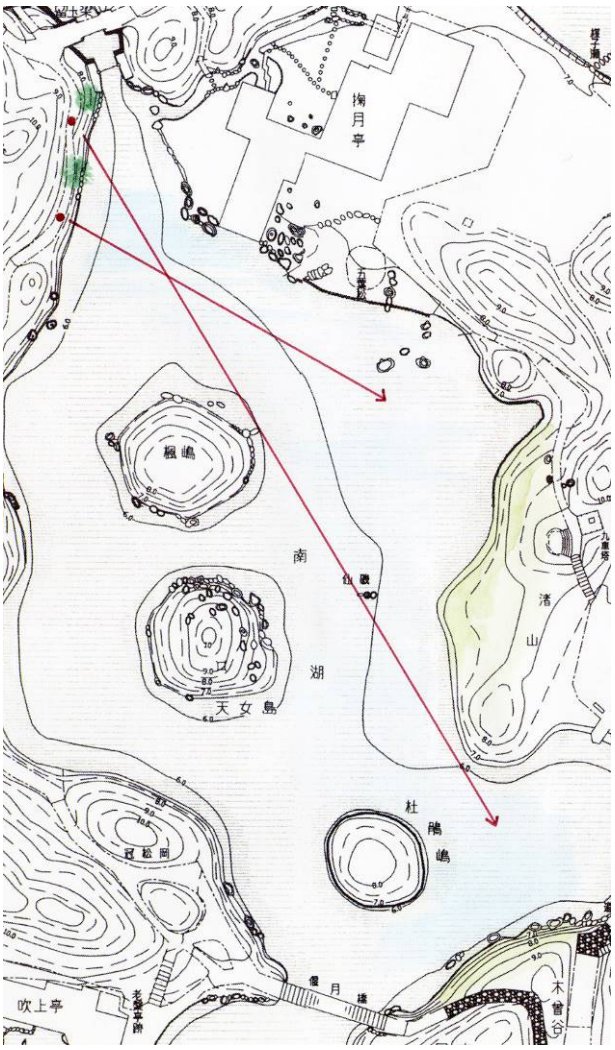

図-9　松の前後からの視線の抜けの違い

q)掬月亭，再び

左手にある築山が切れ，再び南湖が見える．ここからは，先ほどとは全く異なる掬月亭を眺めることが出来る．

先ほどまでは掬月亭を真横から見て，南湖に張り出している様子の眺めが得られていたが，ここからの掬月亭は，紫雲山を背に，ほぼ正面から見える．変化の途中を見せないことによって異なる風景を劇的に見せる手法であると言える．

r)峠越え

さらに進むと，道は二股に分かれる．ここでも２つの道の性格の違いが，対比的に演出される．

左の道の先には水面が見え，右の道は山を越えるような峠の道の趣である．実際は，後者の道もすぐ先に水面があるのだが，突き当りに松があることによって視界が遮られている．また路面の仕上げも異なっており，峠越えの道の路面は丸石の石畳で，山の道の雰囲気を演出する意図が認められる．

s)町に出る

峠越えの道を選択し，そこを抜けると「町」の景が広

がっている．

ここは他の場所と違い，池の岸に石積み護岸が施されていることから，他の場所のように海などの自然の景を表したものではなく，湊のような身近な都市基盤を表したものと考えられる．その先には堰もあり，茶店もあって，これまでの自然のイメージに対して，意識的に人為的な風景とされている．

堰のある遣水は，直線的な河道となっており，また河道に配された飛び石が河積を小さくして流速を早めているために，流水の水面に表情が出ている．また，堰から水が落ちるため水音もたち，「町」のにぎやかな雰囲気を作り出すのに一役かっているといえる．

t)見る―見られる

飛び石を渡って飛来峰の下を通り，渚山に向かうと，いったん，広いところに出る．そこから左手に偃月橋が見える．偃月橋の手前に船着き場があるが，ここに誘われる人もいる．

水に続く階段，雁木が見えるため，これが水辺に誘う装置となっていると考えられる．コイが見えるのでしゃがんでコイを眺める人もいるだろう．

自分が雁木によって水辺に誘われ楽しんでいる様子は，偃月橋から見る人たちにとっては「池のほとりでコイと戯れる人」という風景の一部となっている．コイを見ているつもりが，傍からは風景の一部として見られているという構図がここにある．この雁木のように，人を誘い添景を作り出す施設は，ここばかりではなく栗林公園に多様に散りばめられた装置と考えられる．優れた庭園には，このような工夫が埋め込まれている可能性が高いため，これを一般化して「添景発生装置」と呼ぶことにする．（図-10）

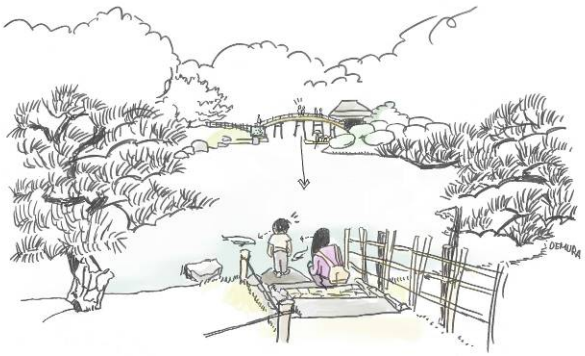

図-10　雁木と偃月橋の関係

u)南湖を鳥瞰する

つづいて渚山に向かうと，渚山からの眺めは，左手の飛来峰から右手の掬月亭まで，南湖の眺めを得られるパノラミックな風景である．視野角が広く，首を回して見渡すことになる．そして眼下の斜面は，低く仕立てられた松で埋めつくされている．

このように，風景の中にいろいろな要素が入り込んでいるのは，洛中洛外図のような鳥瞰的な絵屏風の構図を意識した眺めとして創られたのではないか．あたかも，手前にある低い松の一群は，鳥観絵図の「霞」を模しているようである．斜面を這う低い松の群生が，見るものに図会の型であることを示し，この「見方」の共有を促す役割を担わせたものと推測される．（図-11）

図-11　渚山からの眺めと松

v)再び町へ

来た道を戻り，偃月橋に向かうとそこにまた峠越えのような道が出てくる．「木曽谷」という名前がついており，山をイメージしているのは明らかである．峠を越えると，目の前には偃月橋があり，左手に先ほど通り過ぎた町が見えてくる．

町に出る前に峠を設け，場面転換を図るというつくりがあると考えられる．

w)大名気分で町を眺める

偃月橋の上から吹上亭のほうを見ると，団子を食べる人，コイに餌をやる人などでにぎわっている町が広がっている．

護岸や堰，茶店といった人工物で町の風景を作り出しているほか，茶店に集まる人によって賑わいが生み出されている．吹上亭も添景発生装置であると言える．このように，庭園のしつらえだけでなく，それらによって行動を誘発された人々が風景の一部を作っていると言える．

すなわち，偃月橋の上からは，庭園を造った大名の気分で人々の様子を眺めることが出来るのである．

x)南湖を一望

飛来峰からは，南湖，偃月橋，紫雲山を背負う掬月亭の眺めを得ることが出来る．栗林公園の中でもっとも有名な眺めである．ここからの眺めは，絵画的なシーン景観であると言えるが，そのシーンは海を表現していると考えられる．

掬月亭脇の州浜と荒磯，天女嶋の右端の州浜などによる海の風景の演出は，先に見たように，この庭園で使われる主要な方法である．

それ以上に，ここが有名なシーンになったことには，理由があるのではないかと考えられる．飛来峰からは位置的に南湖が一望できるが，偃月橋の左奥にある冠松岡（かんしょうこう）の松によって，楓嶼，天女嶋と楓岸

の間の湖面が隠れ，これにより「いくつも島の浮かぶ池」ではなく，シンプルな池の姿となっている．こうして要素を絞り込むことによって，主役である偃月橋と背景の掬月亭，紫雲山を引き立たせていると考えられる．

また，掬月亭は紫雲山の山裾にあるように見えるが，実際には背後に函翠池も鹿鳴原も西湖もある．間にある木々の配置により，いくつかの要素が消されることで，掬月亭が山裾にあるように見えていると言える．（図-12）

図-12　飛来峰と島，石，州浜の位置関係

y)北湖からみる「川」

芙蓉峰からは，北湖が一望できる．ここからは人工物もほとんどなく，長細い池の先にある赤い梅林橋がアクセントになるのみで，山の中に赤い橋があるといった風情となっている．山から流れてくる川をイメージしていると考えられる．

池は細長く見えるが，実際の北湖はそのような形ではない．左右の岸の正体は，いずれも湖面に浮かぶ島であり，北湖の岸とそれらの島の間にある湖面が木々で隠されて不可視であるために，島が岸のように見えているのである．また，梅林橋についても，その背後には西湖があり拓けているのだが[注2]，周囲の木々の高さが紫雲山に向かってだんだんと高くなることによって，紫雲山の山裾の山中に，ただ梅林橋があるように見えているのである．

この眺めは，全体的に穏やかな風景となっている．右手に見える前嶼には，たくさんの石が置かれているが，それらはほとんど見えず，基本的に芝生による岸で池の縁が構成されている．

このように，人工物の見せ方や岸の作り方によって，穏やかな自然を基調として，飛来峰からとは性格の違う眺めを作り出していると言える．

飛来峰からの眺めと芙蓉峰からの眺めの性格の違いは背景の紫雲山形にも拠るところが大きい．飛来峰からの眺めでは，紫雲山は中央がくぼんでいて，掬月亭が谷あいにあるように見えるが，芙蓉峰からはお椀をかぶせた形をしている．この山の見えの違いも，両者の雰囲気を異なるものにしていると言える．むしろ造園の構想時には，こうした山の見えを手掛かりに，北湖と南湖をデザインし始めたのかもしれない．（図-13）

図-13　芙蓉峰と島の関係

３．栗林公園の風景の多様性

以上，栗林公園をルートに沿って進みながらシーンの多様性やその変化と，なぜそのような変化が限られた庭園内で生まれるのかを，庭園の構成に注目しながら解読を試みた．その結果，栗林公園の「一歩一景」が示す風景を多様にしている特異な構成があることが分かった．これらを「仕掛け」と定義すると，以下のようにまとめられる．

A.　限られた要素を多様に見せる仕掛け

・池や島によって地形を複雑化

これは，日本庭園ではよく言われていることであるが，

池を複雑化することで，視点場によって池の形が変化し，池という１つの要素を元に多様な風景を作り出している．

・視界を遮る

上記の多様な風景を見せるにあたって，地形や木を用いて変化しする途中を見せない仕掛けを作ることによって，より変化を実感できるようになっている．

また，変化した際に変化前の要素が見えてしまう場合には，木で隠すなどをして見せるものが絞られたり，視線の誘導がされたり，変化が強調されていることもある．

・視点場を決めて石を配置する

日本庭園では，池を海や川などに見立てるが，海を表現する石を，視点場を決めて必要最小限に配置することによって，他から見るとまた異なる風景になる．エリアを基準としたゾーニングという考え方とは異なり，「見る」ことが設計の基準となっていると言える．

B.　複雑な要素を簡素な風景に見せる仕掛け

・木で隠して要素を整理する

庭園内には，様々な要素が入っているが，風景をシンプルに見せるため，木々の高さを調整して借景となる紫雲山とつないで，間にある要素を見せないなど，風景の要素が増えすぎないような仕掛けがされている．

・島の配置を工夫する

池を多様な風景に見せることと連動しているが，島を島としてではなく「岸」として活用するなど，島を見せながら「島」としての存在が消されるようなものもある．

C.　多種の世界観を近接させる仕掛け

・小さな起伏で場をつくる

山の雰囲気が演出される場所では，実際にはすぐ近くに池があることも多いが，起伏を利用して池を「見せない」ことで，山の中の雰囲気を演出するなどしている．

・小さな起伏や植栽によって場を区切る

箱松，屏風松のように，一度視界を閉じることによって次に来る場をより印象的にするがある．これらは「シーン」を作るための仕掛けというよりは，それぞれの場所の「場の景観」を形成する区切りとして役立っていると考えられる．さらに，町に出る前には峠を作るなどの構成は，雰囲気の変化をより強調するストーリーが仕掛けられている箇所であると考えらえる．

D.　行動を誘発する仕掛け

・賑わいの創出

茶屋やコイなどによって人が集まり，溜まることが誘発されている．これが賑わいとなり，町の風景の一部になっている．鑑賞者への楽しみの提供が同時に「添景発生装置」となっていると言える。

・視点の変化

雁木などがある場所では，人がしゃがみこむことが誘発され，それによって見える風景が変化するなど，行動を誘発仕掛けとそれによる風景の変化を起こす仕掛けが見られた．

E.　型の活用

栗林公園では木曽谷など，地名でも場のイメージを伝えているが，霞によって広く鳥観している印象を高めるなど，「型」の活用がされている可能性がある．

また，町に出る前には峠を通るなどのしかけを「型」と考えることも可能である．

F.　体感の活用

丸石の石畳の平滑度が変えてあるなど「歩きにくさ」を出すことによって山であることを強調するなど，体感も重要な要素となっていると考えられる．

４．まとめ

栗林公園の風景の多様性とその仕掛けについて考察した．石や松などの要素だけでなく，構成そのものに多様性を生み出す，要素を絞るなどの多様な風景を作り出す仕掛けがあり，そこに風景の型や，体験を誘発して風景の一部を作る仕掛け，体感による風景の認識など，こまかな仕掛けがちりばめられていることが明らかとなった．

本研究は，作庭者の意図を推測するものではなく，あくまでも栗林公園の巧妙な仕掛けを発見し，その魅力を引き出すことを意図している．したがって，今後はこれをいかにわかりやすく伝えるかや，伝わった場合の印象の変化等について検討したい．

謝辞：本研究において，栗林公園の魅力を発見するにあたり，京都大学の山口敬太准教授にも多くの示唆をいただきました．

注

注 1）本論で取り上げる栗林公園の「一歩一景」の仕掛けには，筆者らが発見したもののほか，徳島大学の３年生の授業で数年にわたりレポート課題としていた中で学生により発見されたものも含まれている．

注 2）梅林橋の奥にある皐月亭は，1800 年代の絵図にはなく，明治 37（1904）年の公園案内図には書かれていることから，明治に入ってから建てられたものだと思われる．

参考文献

1)　白幡洋三郎：大名庭園，講談社，1997